

連載

日 本 語

読解力を鍛える思考のレッスン

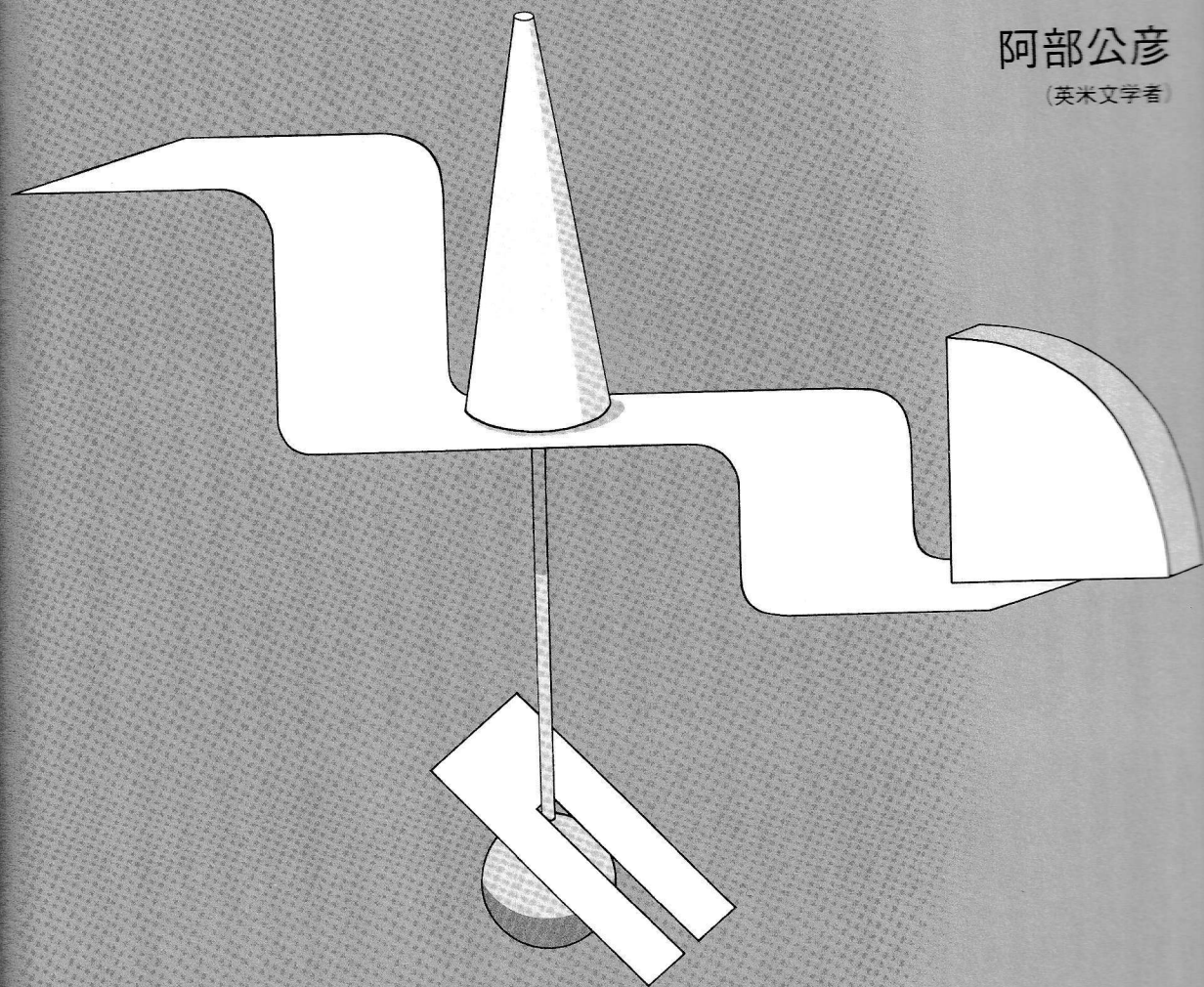
「深 読 み」の ス ス メ

第 9 回

小説の素性

阿部公彦

(英米文学者)



連載のラスト2回は文学作品にフォーカスする。  
文学作品の文章の大きな特色は「素性の不明さ」で、  
学習指導要領、料理本やレシピ、式典での挨拶、契約書などとは違って、  
ちりばめられたヒントから「素性」を突き止めるところに醍醐味がある。  
今回の素材は夏目漱石『坊っちゃん』、綿矢りさ『蹴りたい背中』、  
多和田葉子『容疑者の夜行列車』という三つの作品。

この連載ではこれまで学習指導要領、料理本やレシピ、広告、式典の挨拶、ワクチン接種の注意書き、契約書など、さまざまなジャンルの文書を取り上げ、そのジャンルならではの言葉の振る舞いに注目してきました。「形」を足がかりにすると、言葉の働き方のかかなり深いところまで見通せることがわかったと思います。

文学作品にはこれまでも触れてきました。一見、事務的な文書と見えても、文学作品の文章と並べてみると両者の接点が浮かび上がり、注意書きや契約書にも文学的な作用があることがわかってきます。連載も終わりに近づいてきたので、今回は文学作品そのものにフォーカスし、他のジャンルの文書と比較してどこに特徴があるかを確認してみます。

## 「文学の誕生」を演出する

文学作品はその他の文章とどこが違うのでしょうか。どのあたりに特色があるのか。この一〇〇年ほど、批評家や研究者はずっとこの問いにぶつかってきました。その答えはまだ完全には出ていないようですが、今回の連載で試みたように、文書のジャンルごとの特色を言葉の「形」に注目しながら確認してみると、一つの手がかりが見えてきます。

その手がかりとは「出自」です。これまで見た文章は、ほとんどの場合「出自」が明確でした。レシピにしても説明書にしても、「これはレシピの一部

である」「これは説明書である」というふうにはつきりとジャンルを示すことができました。こうした文章には明確な「場」と「用途」があるのです。

では文学作品はどうでしょう。たしかに表層的な意味では、文学作品にも「場」があります。仮想書店にしてもリアル書店にしても、「小説」「文芸作品」といったカテゴリやコーナーがしつかり用意されており、私たちは「これから小説を買うぞ」「さあ、小説を読もう」という明確な心構えをもって作品を手取るからです。

ただ、文学作品には他の文書のようなはつきりした「用途」はありません。作品を読んでいるとき、私たちは確実に何かを行っているのですが、そこには「用途」と言明できるような目的はありません。せいぜい「娯楽」とか「趣味」といった言い方でゆるく枠を示せるだけです。そのため、文学作品の文章はいつたんとともに「場」から切り離されると、どことなく所在なさそうに見えてきます。しかし、まさにこの所在なさこそが、つまり、明確な用途がないということこそが、文学作品の最大の特徴かもしれません。

そのあたりがはつきり出るのは次のような反対方向の実験を行ったときです。ジョンサン・カラーは著書『文学理論』(Literary Theory: A Very Short Introduction, 1997)の中で、明確な「用途」がないことが文学作品の文章の特徴だという見方を紹介した上で、逆に他のジャンルの文書を「文学化」して

みせます。やり方は簡単です。レシピなり説明書なりを、それが置かれていた「場」から取り出しコンテキストを抹消するのです。すると、その「用途」が不明になります。不思議なことにこの脱コンテキスト化/脱用途化を経ただけで、文章がまるで文学作品であるかのように見え始めるのです。カラーの一節を引用してみましよう。

勢いよくかき混ぜて、五分間そのまま置いておく。

Stir vigorously and allow to sit five minutes.

これは文学だろうか。私はこれを、レシピという実用的なコンテキストから引き抜くことによつて、文学にしたのだろうか。あるいはそうかもしれないが、本当かどうかは明確ではない。(中略)これを文学にするには、タイトルを考えて、タイトルとこの一行との関係が問題を投げかけ、想像力をつき動かすようにしなければいけないだろう\*。

どうでしょうか。レシピの一部分を断片的に引き抜いて提示しただけなのに、どこかミステリアスな雰囲気が出てくる気がします。もちろんカラーも言うようにコンテキストからの抜粋だけでは文学化は完成しないわけですが、用途を抹消するだけで文章にはすでに何らかの化学変化のようなものが起きます。これがどうやら作品化の第一歩なのです。

カラーはさらにW・V・O・クワインの哲学書『論理的観点から』の冒頭をわざと行分けした上で引用し、「こんな風に頁の上に書き留められ、怖しげな沈黙の余白に取り囲まれると、この文は、文学的と呼べそうなある種の注意を引きつけることができる」と言っています。

ひとつ奇妙なことが

存在論的問題には、在る、その

単純性。

A curious thing

about the ontological problem is its

simplicity.

カラーの「沈黙の余白」という言い方からもわかるように、文章に化学変化が起きるのはそれを「孤立」させたときです。ジャンルや場というコンテクストから切り離され孤立した文章は、真剣に読むべき対象へと格上げされます。その結果、読者は「文学につきものの解釈活動」へと誘われます。そうやって読者がある種の姿勢へと導き、「読む」という行為を意識的に行わせることが「文学の誕生」につながるということなのです。

## 『坊っちゃん』の素性

孤立こそが文学作品の文章の大きな特徴だとする

と、文学はどこかに「素性の不明さ」を抱えているということにもなります。もちろん、この「素性」は永遠に不明なわけではありません。素性の不明さを少しずつ乗り越えながら、意味を受け取り、解釈し、さらには読みどころをとらえていく、といった作業が作品を読むときには伴います。こうした作業を通して、どこか曖昧模朧とした状態から、少しずつ霧を晴らすように何かをとらえていくというのが文学作品の読みのプロセスなのです。

このようなことを言うと、試験問題のように問いがあつてそれに答えを出すというプロセスを思い浮かべる人もいるかもしれません。実際、文学作品の抜粋は入試などでも出題されやすいです。もともと作品中では言葉が脱コンテクスト化され「孤立」していることが多いため、そのコンテクストをあらためて確認するという作業を出題者が要求しやすいのでしょう。

たとえば連載第八回の最後で取り上げた夏目漱石の『坊っちゃん』冒頭の一節（「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ」という部分）に線を引いて、「ここではなぜ主語の「私」や「おれ」や「僕」が省かれているのか。そこには主人公のどのような性格が反映しているのか？」といった問いを立てることで、文章のコンテクストや「素性」を究明する作業に読者を導

くことができるでしょう。

ただ、作品の言葉の「素性」はこのように明確なQ & Aの形に落とし込めるとは限りません。今の冒頭部には他にももつと広い意味での「素性」を示す特徴が見受けられます。たとえば波線を引いたところに注目してください。

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

これらの文言に共通してあるのは、さまざまな形で「言う」という行為が示されているということなのです。書き手が意図したのかどうかはわかりませんが、小説中で人物たちがあれこれ発言するのは、決して不思議なことではないでしょう。しかし、こうしたいろんな人が物を言う、という状況が連続して出てくるといふ特徴にあらためて注目すると、『坊っちゃん』という小説世界の喧嘩や動きの多さ、主人公が周囲